

# 現代都市の中層集合住宅におけるプライバシーの設計

- 暮らしに寄り添う生活領域 -



**主題** プライバシーを得ることで外界と接続する中層集合住宅を設計する。

現代都市の集合住宅は、プライバシーが欠如している。

『「プライバシーとは、個人、グループまたは組織が、自己に関する情報を、いつ、どのようにまたどの程度、他人に伝えるかを自ら決定できる権利である。」政治学者ウェスティンによって定義される。』

(「集住のなわばり学」より抜粋)

そんなプライバシーを欠如した状況では、都市に溢れているあらゆる情報を得る選択可能性を失っている。現代都市の集合住宅は、プライバシーを得ることで、閉鎖的で固定化されている領域内に、外界のあらゆるモノやコトを享受できるのではないだろうか。

**背景** 固定化された窮屈な暮らし

## ■現代都市の集合住宅

### 閉鎖的な集合住宅

- ・経済原理による均質化 ⇒特に1R,1DKは、プランニングで距離が取りづらい
- ・外界への不安感により、カーテンを遮る
- ・ネット環境が発達し、住戸内部だけで生活している

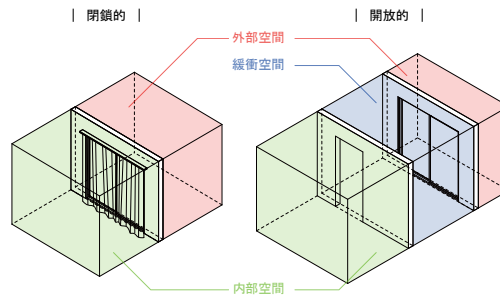
→ 外界の知る機会が減少し、個人の領域が固定化している。

### 開放的な集合住宅

- ・住み開きなどを行い、外界との関係を持つ
- ・共有空間や中間領域を緩衝空間を設けている

誰かと繋がることや、関わる事が前提として計画されている。しかし、都市では、誰もが直接的な関わりや、繋がりを求めているわけではない。

→ 脅迫感があり窮屈さを感じる。



どちらも住人が外界の情報を取捨選択する権利がなく、プライバシーが欠如している。それにより、個人の領域は外界と繋がることはなく、生活が固定化され、窮屈な暮らしを強いられている。

**目的** 間接的に外界と関わる

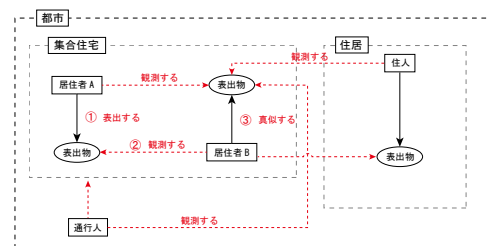
都市には、人によって現れるふるまいや環境、自然がつくる環境や情報などのあらゆる情報が溢れている。

→ 外界の情報を享受することで固定化されている個人の領域に変化を与える

### ■間接的な繋がりを生む、連鎖関係

- ① 居住者は領域を広げるために住戸内部から表出物が現れる。
- ② その表出物を別の居住者が観測し
- ③ それを真似するように表出していく。

この関係が連鎖的に起こることによって出来る、間接的な繋がりによって外界の情報を得ることを目的とする。



**調査** 提案の判断基準を模索する

文献調査 | 住戸内部の個人の領域と外界の関係性を集住のなわばり学を参考になわばり学観点から調査する。

## ■なわばりと生活領域



「なわばり」とは、「他者の侵入から防衛された一定の地域」「生活領域」とは、「ある個人なり集団が、自分あるいは自分たちのものという意識をもち、そこを支配するところの一定の空間」と定義される。

人間の住居であれば、住居不可侵条約や警察という社会組織を通して保護されることがあるため、防衛がおこなわれることがない。その為、生活領域と呼ぶ。

(集住のなわばり学から引用)

## ■領域表示物の二つの機能

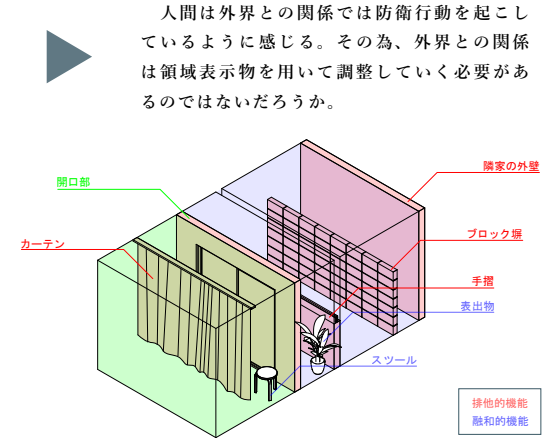
領域表示物とは、領域の占有を他人に語りかけるものの総称である。そんな領域表示物には二つの機能がある。

### 「排他的な機能」

領域から他人を遠ざけ、それにより無用な接触と混乱を回避する  
ex) 手すり、カーテン、すだれ、ゴミ箱、洗濯物、開口部、壁

### 「融和的な機能」

他人の興味を誘うことや、領域の緩衝材になることで、他人との交流を促す。  
ex) 植物、バルコニー、テラス、人形、絵画、構造フレーム



この二つの機能は、住戸内部と外部を単一的につないでいる現在の境界部に変化を与えることが出来、住戸の境界部に配置することで選択性を増やす手がかりとする。

事例調査 | 事例を調査することで建築形態と領域性の関係性を調査する。同時に、領域を調整する要素や方法を模索する。

## ■調査対象

新建築データベースに掲載されている、集合住宅を調査する。  
※ただし、集まることや誰が住むか想定されている、シェアハウスや寮、コーポラティブハウスは今回の目的に合致しないため、除外する。  
※また、建物全体ではなく、数戸の改修事例は建物全体の関係性が見えづらい為、除外している。

## ■評価基準

個人の領域がどこに設計されているのか、開口部の大きさや形状がどうなっているのかなどを調査し、領域性との関係性を模索する。

## 開口率と領域性

開口部は大きさや数などの開口率によって内部空間と外部空間の関係性は変わる。基本的には、開口率が高ければ領域性は開放的になり、低ければ閉鎖的になる。しかし、開口部の角度や位置によって外界の入り込み量が変わり、領域性と一致しない場合がある。それらの事例から、開口率と領域性の関係性に変化をもたらす要因をあげる。

事例1: 1980年代建築「ペナ・ジュン」室内空間と1980年代建築の事例

事例2: 2012年建築「東京駅前100」建築100事例

事例3: 2012年建築「東京駅前100」建築100事例

事例	開口部	緩衝空間	領域表示物
事例1	○	○	○
事例2	○	○	○
事例3	○	○	○

事例4: 東京駅「アートメント」事例100事例

事例5: 2012年建築「東京駅前100」建築100事例

事例6: 2012年建築「東京駅前100」建築100事例

事例	開口部	緩衝空間	領域表示物
事例4	○	○	○
事例5	○	○	○
事例6	○	○	○

調査総括 | 調査を基に領域を調整する要素を考察する

## ■領域を調整する要素

個人の領域と外界の距離感を調整する要素として、内部空間と外部空間、その間にある境界部の関係性を変化させている事例が多くある。その為、内部、境界部、外部の各方面や相互の関係性を考慮しながら、領域を調整する手がかりを検討する。

調査から得たプライバシー確保に必要な空間性や外界との関係性の要素は右記の通りである。

- ① 領域表示物を置く空間をつくる  
領域表示物を置く空間を作ることで外界との関係性を居住者自身が変更できる。
- ② 外界の入り込み量を調整する  
外界の侵入を制限することで、開口部周辺の行動を促進する。
- ③ 内部に選択可能性をもたせる  
住居の自由度を増加することで主体性を促す。
- ④ 外部との関係性をふやす  
関係性が増えることで、その時々で享受する外界の情報を選ぶことができる。

これらを叫ぶことで、外界への選択可能性を確保する。

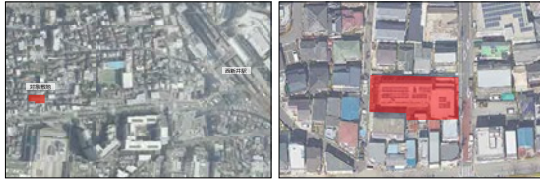
## 敷地 東京都足立区西新井

### ■選定理由

- ・1R・1K・1DKの賃貸集合住宅が多く建築されている。
- ・西新井駅から徒歩10分圏内にあり、1R・1K・1DK集合住宅が立てやすい。

### ■敷地概要

敷地面積：565㎡  
用途地域：第一種住居地域  
容積率：200% 1130㎡ 建蔽率：80% 452㎡



## 提案 設計手法を模索する

スタディ | 個人の領域と外界の距離感を調整する要素として、内部と外部空間、その間にある境界部のあり方がどのようになれば外界への選択性が得られるのかを検討する。

### ■スタディの狙い

個人の領域と外界の距離感を調整する要素として、内部空間と外部空間、その間にある境界部のあり方や関係がどのようになれば外界への選択性が得られるのかを検討する。

- 内部**  
プランニングや、開口部の配置、住戸同士の関係性に よる空間性の変化を検討する。
- 境界部**  
境界部の大きさや形状による個人の領域と外界との 関係性の変化を検討する。
- 外部**  
周辺環境との関係性や敷地に対しての建ち方によ る、建物周辺における外界の情報の変化を検討する。

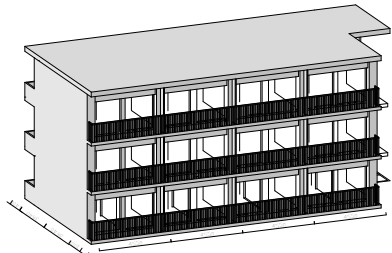
| ケーススタディ | 従来の1DKの集合住宅を基準に部分的に設計していくことで、居住者が外界との距離を自ら選択できる関係性を模索する。

### ■スタディの前提条件

- 内部スタディ**
  - ・住戸条件
    - ・1DK規模を想定(約32㎡)
    - ・バルコニー、浴室、トイレ、居室、玄関を計画する。
  - ・周辺の仮定
    - ・隣戸が連続して計画される。
    - ・外界の情報はスタディ毎に設定する。

- 境界部スタディ**
  - ・建築物の条件
    - ・1DK規模を想定
    - ・一層4戸×三階
  - ・周辺の仮定
    - ・三層、四層の集合住宅が建っていると仮定する。
    - ・南側にバルコニー北側に共用廊下がある集合住宅と仮定する。

- 外部スタディ**
  - ・建築物の条件
    - ・1DK規模を想定
    - ・高さ制限や斜線制限を考慮して、三層～四層を計画する。
  - ・周辺の仮定
    - ・計画敷地にてスタディする。
    - ・周辺のバルコニーや、開口部からの視線を考慮する。



【ケーススタディモデル】

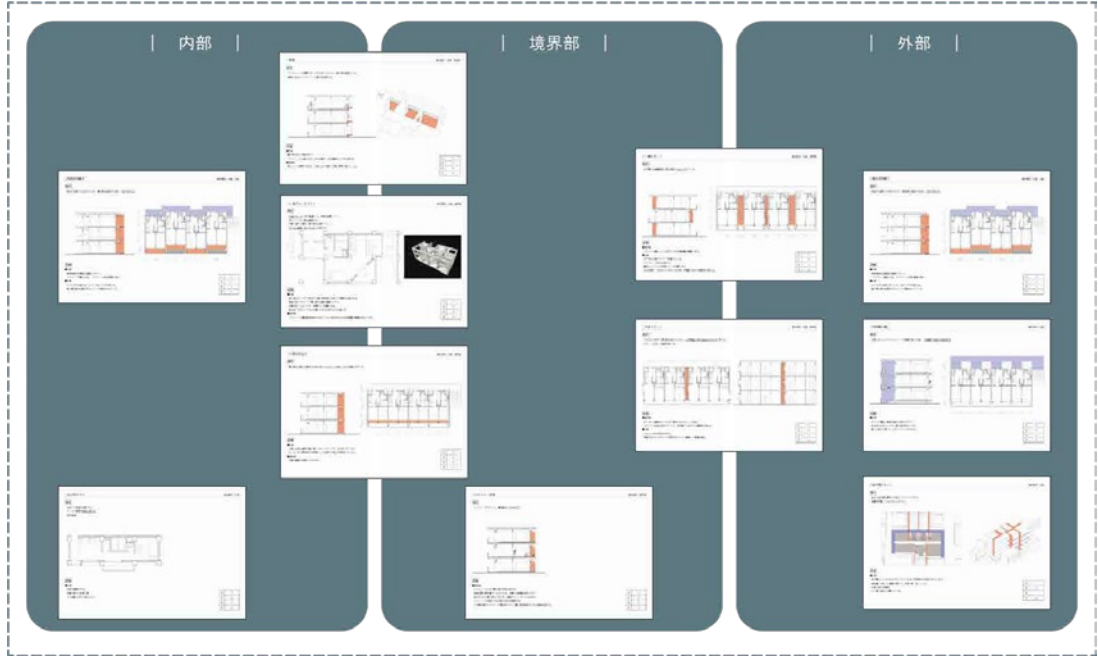
### ■スタディの手順

- ①部分的な操作を行う
- ②実際の空間と調査に対しての評価を行う
- ③その評価から領域に影響を与えている部分操作を抽出する。



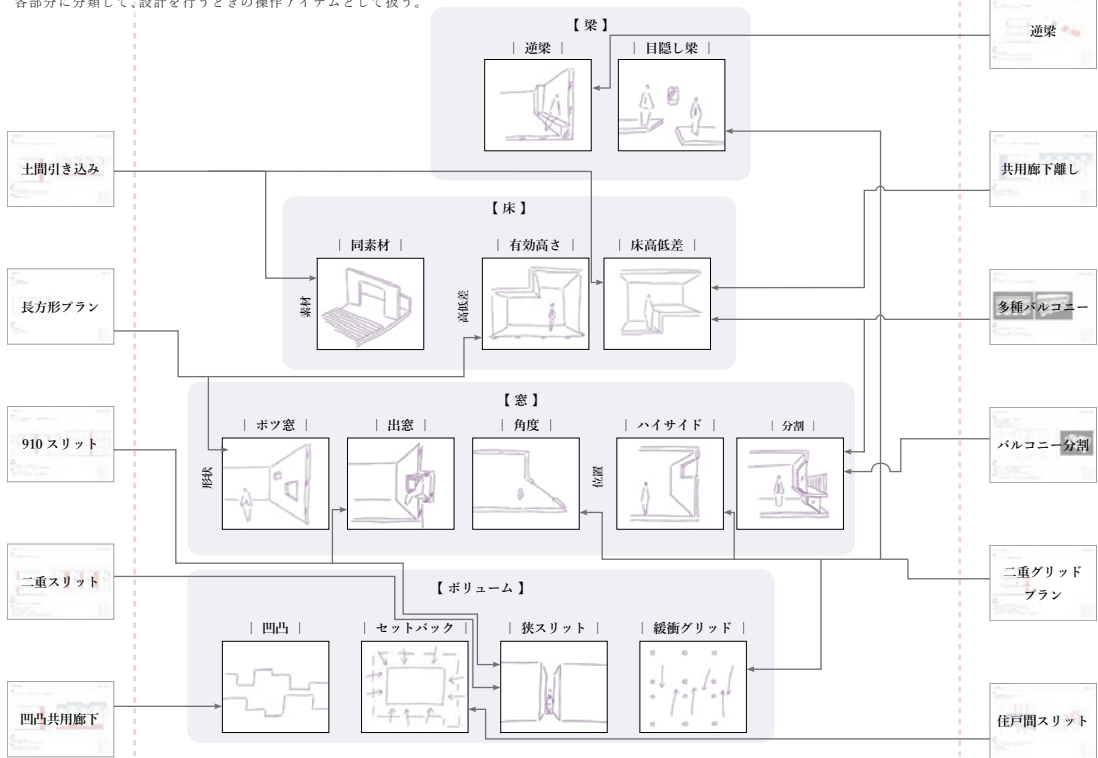
### | 実際の判断 |

- ①バルコニーの高さを二種類ずつ計画する。
- ②空間に対して：境界部の選択性とバルコニーの高さの違いによる空間性の違いが評価できる。  
調査に対して：調査における①②④に対する有用性がわかる。
- ③評価を生んでいる空間性を生んでいる操作として以下を抽出する。
  - ・床の“高低差”による内部の空間性の違い
  - ・開口部を分ける事で性格の違う窓を生む“分割”



### ■操作抽出

スタディから領域を調整する操作を抽出する。各部分に分類して、設計を行うときの操作アイテムとして扱う。



設計アイテム 抽出した操作アイテムを、計画方針に応じながら組み合わせることでアイテム化して、各空間を設計する。

■計画方針

□内部

・季節や気温、体調、気分次第で生活をする拠点を選択しながら暮らすことできる。  
内部空間を計画する。

□境界部

・内部空間に変化をもたらす為には個人の領域と外界の関係性が一定にならないよう  
に外界との関係性が違う開口部を計画する。  
・領域表示物を置くことで、居住者が領域の調整ができる  
・領域表示物が観測しやすい開口部にする

□外部

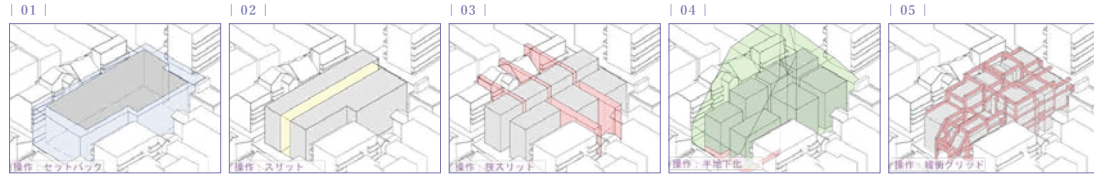
・住戸周辺の外界の情報を調整しながら計画する。  
・領域表示物の表出場所と共用部、個人の領域の関係性を考えながら計画する。

■操作方針

・空間を分割可能  
・開口部ごとの空間になるように  
・空間利用の選択性  
・外界との関係性が異なる開口部を計画する  
・生活領域に入り込む外界の情報を制限する開口部にする  
・排他的機能を開口部からずらす  
・内部と外部に一体感をもたせる

・共用部をまとめる  
・共用部から領域表示物を置く空間が見える配置とする  
・周辺状況に対応する  
・外界の情報の入り込み方が違う外部を計画する  
・玄関前に専有間を演出する

0 配置計画 周辺との関わり方や、敷地内の外界の環境を整えるように計画する

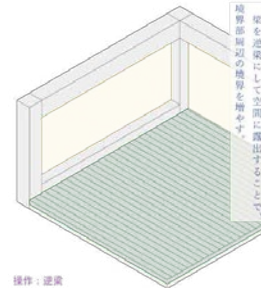


01 | ボリュームを周辺から距離をと  
りながら配置する。  
02 | 共用廊下を敷地中央に設けるた  
めに、南北で分棟にする。  
03 | 周辺の住戸間隔でスリットを設  
け、敷地内部の採光、通風を図る  
04 | 斜線制限を考慮してボリューム  
を削り、一部半地下にする。  
05 | 住戸間隔に合わせて構造フ  
レームを配置する。

■A-A' 断面パース

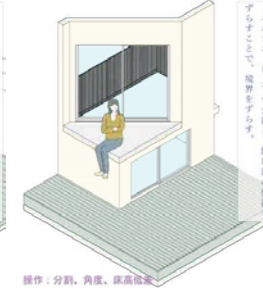


1 境界をふやす  
逆梁



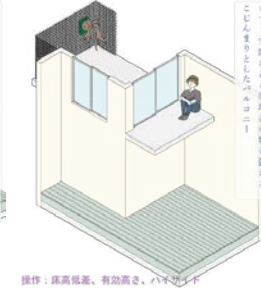
操作：逆梁

2 境界をずらす  
上下バルコニー



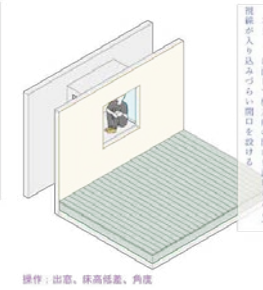
操作：分割、角度、床高調整

3 こじんまりとした  
ロフトバルコニー



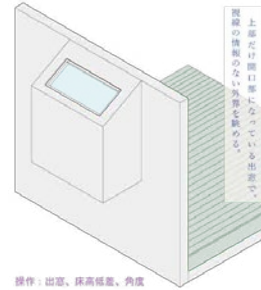
操作：床高調整、有効高さ、ハイランド

4 観測する  
スリット出窓



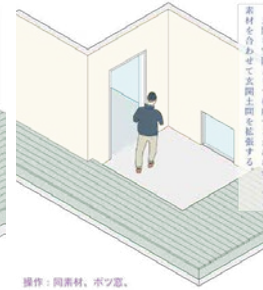
操作：出窓、床高調整、角度

5 空を仰ぐ  
見上げ出窓



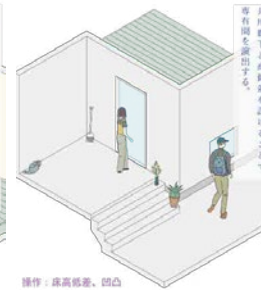
操作：出窓、床高調整、角度

6 ホーチを狭く  
玄関土間



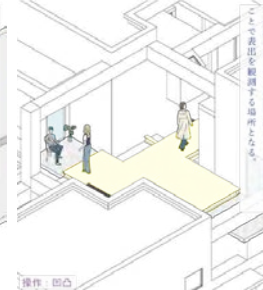
操作：同素材、ポツ部

7 専有感のある  
玄関ポーチ



操作：床高調整、凹凸

8 表出が溢れる  
共有廊下



操作：凹凸

■B-B' 断面パース

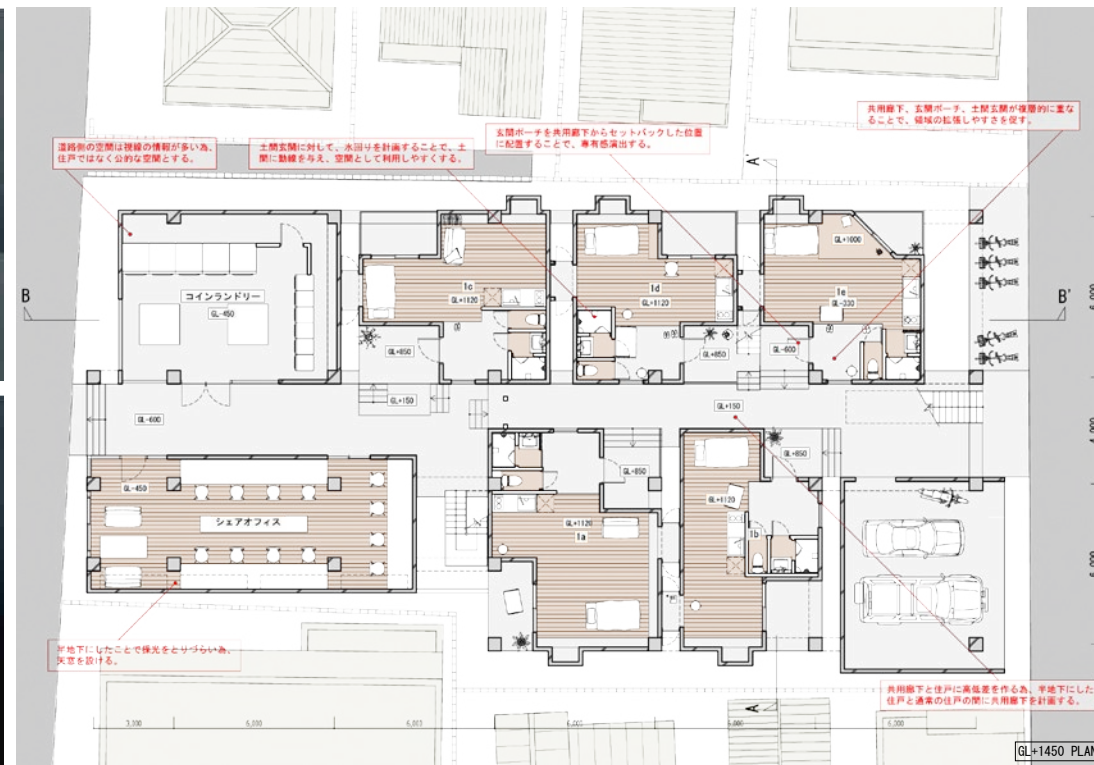




GL+10150 PLAN



GL+7250 PLAN



GL+4350 PLAN

■まとめ

本設計では、間接的な関わりを生むきっかけとして領域表示物を用いた。領域表示物は、住人の意思に応じて、外界との距離を調整する機能を持つ。その機能を活かすために、領域表示物の受け皿となる空間を住戸の境界部周辺に計画し、領域表示物を配置することで、住人の暮らし方次第で領域が伸縮していく集合住宅を設計した。

本来一か所に固まっている境界を分解していくことで、外界との関係の調整代を生むことができた。

それにより、多様化している現代都市における様々な暮らし方、外界との関わり方を支える集合住宅の形を提示します。

